

★VOL 7 令和2年12月4日発行



絵本の楽しさをあすそ分け

■「おふろにはいろ」

三浦太郎／作

作者は、幼児向け絵本の超人気作家。●最後のページに、〈作者のことば〉として、「おふろは楽しくて、あったかいよ」と娘に語りかけていたときの気持ちで、絵本をつくりました…と書いています。●玉ねぎやとうもろこしがページごとに服を脱いでおふろに入りますが、とても気持ちよさそう。●リズムの良い短い文に絶妙な色づかいとキャラクターの絵が組み合わせさり、楽しさいっぱい。裏表紙にはしゃれっ気のある絵のオマケ付き！●1歳くらいから。



■「サンタさんのおとしもの」

三浦太郎／作

色づかい、構図、絵の線、サイズ…どれもデザインのすごさがダイレクトに伝わってくる作品。静かで落ち着いたクリスマス・イブの夜を描く〈黒色〉の使い方にとりしめます。●女の子が拾った大きな赤い手袋をめぐるかわいい物語もステキ。裏表紙まで楽しめます。クリスマス絵本の定番になるかも。●3歳くらいから。



■「ぼくんちのおふろ」

山田美津子／作

ひとりでおふろに入るのが苦手という子どもにとって背中を押してくれる作品。●おふろに入ったらカッパがやってきて、一緒に遊んでくれる…いつしか、おふろが楽しいひとときに。●2歳くらいから。●『おふろだいすき』（松岡享子／作 林明子／絵）という古典的名作もどうぞ。



■「めんのずかん」

大森裕子／作

わずか18センチ四方、28ページの小型ながら、ていねいに作られている作品。●ラーメン、パスタ、そば、うどん、その他のめん類を材料や具材、種類ごとに子どもに分かるように説明をつけています。●何ととっても、一つひとつの料理がおいしそう。作者の腕が光ります。●シリーズとして、『おすしのずかん』『パンのずかん』『ねこのずかん』があります。●4歳くらいからおとなにも。



■「こたつうし」

かわまたねね／作 長谷川義史／絵

身も心もあったか、心地よくなれる作品。●こたつは、北海道ではなじみがないけれど、こたつは家族が集まり、ミカンを食べたり、お茶を飲んだりするだんらんのシンボル。●最初のページで、こたつから出なくなったお母さん牛が、こたつと合体して〈こたつうし〉になったと説明してスタート。こたつを中心にお母さん牛と子ども牛たちが、ただただのんびりと過ごす幸せな物語。●2歳半くらいから。



います。●3歳くらいから。

■「ガチャガチャぽん！」

ナカオマサトシ／作 森あさ子／絵

子どもたちに人気の〈ガチャガチャ〉を題材にした作品。●弁当箱のガチャガチャから始まり、最後はバスまで出てきます。毎回、好きなものを選んでいくと、それぞれがつながり、最後には楽しいことが待っています。カラフルな絵が楽しく、ガチャッと回すワクワク感を味わえます。●3歳くらいから。



■「うごきません」

大塚健太／作 柴田ケイコ／絵

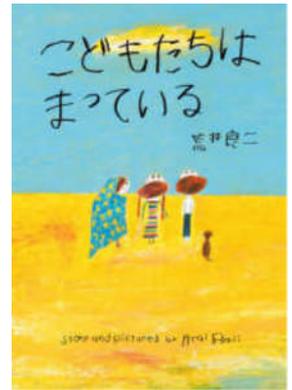
水辺で魚をつかまえるとき以外は、ぴくりとも動かないハシビロコウという鳥が主人公。●いろいろな動物たちが近づいたり、おもしろいことをしてもじっとしたまま、魚が水面に現れた瞬間のハシビロコウの変化…その落差がおもしろさのポイント。●動かないハシビロコウと目の描き方が作品の魅力アップさせて



■「こどもたちは まっている」

荒井良二／作

絵本の絵を隅々まで見る（読む）のが好きな子にオススメ。●見開きのページの左上に〈こどもたちは まっている〉の文があり、右上に〈…を まっている〉の文がそっけなくあるのみ。●世界中のいろいろな場所で、子どもたちが何かをしながら〈待っているらしい〉イメージ豊かな絵が印象的。●この絵本に反応するには読んでもらってすぐよりは、しばらく心の中で熟成する時間が必要かもしれません。●4歳くらいから。



本との出会いを

ボーイズ&ガールズに

■「めいたんていサムくん」

那須正幹／作 はたこうしろう／絵

小さな気づきをヒントに、子どもの日常にあるちょっとふしぎなできごと

を解決するサムくんの物語。児童文学の大ベテランが、はたこうしろうのポップな絵と組んで楽しい物語集にしあげました。●赤ちゃんのときから口にくわえていた空色のタオルをハンカチにし、そのハンカチの

匂いがかぐと頭が冴え、サムくんの推理力がパワーアップ！ ●ふしぎなできごとの謎を物語の中でサムくんが説明してくれるので、本を読むのが苦手な子にもオススメです。現代の問題にも触れています。小学校低学年に。



■「魔女ののろいアメ」

草野あきこ／作 ひがしちから／絵

サキはお姉ちゃんに腹を立てています。お姉ちゃんはずるいのです。 ●サキは屋台で出会った魔女から、ずるいお姉ちゃんの悪口を10こ考えて作る〈のろいアメ〉をもらいます。 ●サキは日頃のお姉ちゃんのことを思い出し、悪口をあれこれ考えます…お姉ちゃんと妹の心の中にある、お互いの好きなこととときらいなことがまぜこぜになってしまう気持ちをユーモラスに描いています。 ●魔女と相棒のクラスがかくし味。 ●小学校低学年に。



■「れいとレイ」

うちやまともこ／作 岡山伸也／絵

サブ・タイトルは「ルック・アット・ザ・ブライトサイド」。ものごとの明るい面、良いところを見るという意味から、この作品では「いやだと思ふことでもちゃんと楽しみに変えていく」前向きな



気持ちを大事にするという作者のメッセージが込められています。 ●アメリカから10歳の男の子／レイ一家が、同じ年齢の女の子／れいの家の隣に越してきました。レイは1年間、インターナショナル・スクールに通うそう…れいは、レイのことが気にかかり、話しかけたいと思いますが、〈言葉〉が高いハードルに。 ●レイとれいを中心に、家族やクラスメイトも含め、なかよくするための壁になっている英語と日本語の境界を乗り越え、異文化を理解し合うための勇気を出すエピソードがいっぱい。 ●れいとレイが章ごとに一人称で語る形式が、2人の気持ちの変化をととてもよく表しています。気持ちよい終わり方は、作品のテーマそのもの。 ●小学校中学年から。

■「消えた落とし物箱」

西村友里／作 大庭賢哉／絵

教室にある〈落とし物箱〉と60年前のできごとが友だちとの結びつきを強くする物語。 ●小学校4年生の日菜乃たち5人のグループは、国語の学習で〈みんなに知らせたいこと〉をテーマにした新聞を作ることになりますが、いまいちまとまりがありません。そんなとき、教室にある落とし物箱に入っていた校長先生から借りた大切な本が箱ごと消えてしまいます。 ●落とし物箱は、外国の女の子の絵が描かれた赤い箱で、学校にはふしぎな噂がありました。 ●日菜乃たち5人は、赤い箱を探しながら赤い箱の真実に近づくにつれ、〈友だち〉の大切さに気づきます。 ●物語の展開がテンポ良く、ふしぎさの謎に〈友だち〉を考える60年前のせつなく、心温まるエピソードがあるので、最後までおもしろく読めます。 ●小学校中高学年に。 ●同じシリーズに『消えた時間割』もあります。



■「あおいの世界」

花里真希／作

ちょっとしたことで空想の世界に入っていく小学校5年生の女の子／あおいが家族揃ってカナダのトロントへ移住し、あおいを中心とし



ながら家族みんなが成長していく物語。●最初からあおいの大事な友だちになったアディソンは、ファースト・ネーション（先住民）の女の子。物語の中では、ファースト・ネーションの子どもの問題を考える〈オレンジ・シャツ・デー〉に触れ、〈エブリ・チャイルド・マター：すべての子どもは大切だ〉という言葉を使い、あおいのお母さんに使わせています。●カナダ特有の多文化社会の中で、あおいが少しずつ自分自身を表現し、あおいの〈空想〉をアディソンといっしょにショート・ストーリーコンテストに出す作品にしあげていくところは物語の肝！●現代を感じられる作品。●小学校高学年から中学生に。

■「イズナくんは今日も、」

いい櫻よ／作

中1の女の子／春日は同級生のイズナくんが気になっています。イズナくんは極端な人見知りで、クラスの中でも浮いています。人とどう接して



いいのか分からず、つい乱暴な口調になってしまうのです。でもイズナくんには、人と人、人と物の〈縁〉を感じ取り、縁を結びつけていくふしぎな力があるのです。●ふとしたことから、春日はイズナくんの秘密を知り、イズナくんと一緒に、途切れてしまった物と人との〈縁〉を探し、

再び結びつけることを始めます。●縁でつながる人との輪が広がり、春日のおじいちゃんの言葉「迷ったときは、勇気があるほうを選びなさい」に励まされ、周りを巻き込み、縁の深さ・豊かさを生み出していきます。●物語のラストは、春日のおじいちゃんの言葉の原点、後悔しない生き方の大切さを伝えています。●中学生から。

■「てのひらに未来」

工藤純子／作

人を幸せにするモノづくりと平和な時代に生きる中高生のことをちょっと考えてみては？という作品。●中3の女の子／琴葉の家は、創業80



年の下町の小さな精密機械工場。琴葉は、自分でも認める優柔不断な性格。文中、「得意なものも、やりたいことも、夢もない。何もない、からっぽ」とつぶやくくらい。●物語は、琴葉の家に天馬という少年が住み込みで働くところからスタート。●3代目として工場を継いだお父さんの強い信念の背景と天馬がやってきた理由に共通する戦争が引き起こしたモノづくりの原点と家族の崩壊が大事なキーワードとして、ていねいに綴られています。●天馬が崩壊した家族の過去に向き合いつつも前に進み、琴葉は父親と天馬の姿を見て、優柔不断ながらも少しずつ自分の進みゆく道を確認なものにします。琴葉と天馬の成長物語として読むと、2人が紡ぎ出すラストは、読み手の心を熱くします。●戦時中、戦争で徴兵され亡くなった美術学校の画学生たちの作品を展示している長野県の無言館のことに触れ、現代の平和を考える材料にもなっています。●中高生に。●常呂図書館には、〈無言館〉に関する資料が5冊あります。『いのち わたし、画学生さんのぶんまで生きる』『戦争が生んだ絵、奪った絵』『無言館にいらっしやい』『約束 無言館への坂をのぼって』『わたしたちの無言館』